



毎月十五日発行 所大像
宗宗 〒811-3505 福岡県宗像市玄海町
電話 (0940) 62-1311㈹
http://www.munakata-taisha.or.jp/
定価 一年送料共 1000円

沖津宮現地大祭斎行

～年に一度の渡島参拝～



た。祭典後名班に分かれた
参拝者は、相当の神職から
現地での諸法事等をうけ村
内に宿した。

早朝6時、福岡海上保安
部の「げんうん」を主導に
大島・神津間の渡船「し
おかぜ」、大島漁協所属漁
船「第八高地丸」「春日丸」
が次々に出航。

天気は快晴、海上はベタ風
で初夏の潮満るすばらしい
日和の中を船団は沖ノ島に
向け進んだ。

順調に航海を続け約一時
間で沖ノ島に到着、全員直
ちに海中にて禊を行い、心
身を清めた後、原生林の覆
い繁る参道を沖津宮本殿へ
と登った。

午前十時祭典が始まった。
御神前には全国各地の参拝
者からの御神酒・献品が供
えられ、太田宮司が国家・
皇室の安泰、国民の幸福、
そして日本海海賊で日々露そ
れぞれの國の命をかけて
戦いつていた人々の慰
靈・世界和平を祈る祝詞を
奏上。次々に各代表者が玉
串を捧げて、敬虔な祈りの
中祭典は無事満了。終了

事前の申し込みでは参拝希
望者が殺到し、当社では
「神の宿る島沖ノ島」や新
聞・雑誌等の報じの影響か
で、最初の参拝者数は
は二〇〇人の参拝者を受け
入れた。

今年は、長年にわたる田心
三姫神(たごひめのかみ)
を祀る沖津宮で年に一度行
われる沖津宮現地大祭が五
月二十七日(土)午前六時より
開催された。

沖津宮(沖ノ島)・中津宮
(筑前大島)・辺津宮(玄海
町)の三宮を総称した名称
であり、それぞれ天照大神
の三姫神をお祀り申し上げ
ている。長年にわたる田心
三姫神(たごひめのかみ)
を祀る沖津宮で年に一度行
われる沖津宮現地大祭が五
月二十七日(土)午前六時より
開催された。

今から九十七年前の明治
三十九八年(一九〇五年)五月
二十日、西郷隆盛が大島に上
陸して、島民の大島守護軍を
率いて、島を攻撃した。この
戦いは、島民の大島守護軍を
勝利を収めた日(旧海軍記
念日)をトとして年に一度
渡島安全祈願祭が施行され

正午過ぎ参加者は各船に
乗り込み沖ノ島を周遊し、
秘なる景観を拝しながら帰
路についた。

一方、沖ノ島に渡島出来
ない女性子供達は、大島
の沖津宮参拝所の祭典に参
列し、遙か沖ノ島に祈りを
捧げた。

九十七年前の国際情
勢は、欧米諸国がアジア・
アフリカ・南米を植民地と
して取り合うという中で、
欧洲への進出が難しいロシ
アは、シベリアへ進出、極東
まで達し、朝鮮半島進出を
狙っていた。その次は日本
である。当時アジアで唯一
独立し、歐米諸国と渡り合
ていたのは日本ただ一国だ
けであった。その中で開戦
するには相当の勇氣と覚悟
があったにちがいない。そ

が、西郷の命運をかけて日
本海々戦が行われたのが五
月二十七日(土)だったのです。
――◇――◇――

明治三十九八年(一九〇五年)当
初、西郷は沖津宮に勤務して
いた神職の日誌は、
次のように記している。

五月二十七日
西風強暴大霧霞
午前七時四十五分に「警
戒を要す」との電報を受け
る。正午頃島の西北より砲声
が聞こえ出す。午後一時頃「我艦隊見え
ざりしや」の電報をうける。
当日は霧霞のため五海里
より先は見えず。

その後、一同波止場で沖
ノ島間より調理された刺
身・鮓魚、その煮汁で食べ
るソーメンに屋台で打ちな
がら出航まで和やかな一
時を過ごした。

大祭前日の二十六日筑前
大島に渡島した太田宮司以
下九人の神職を始め、翌日
は二〇〇人の参拝者を受け
入れた。

正午過ぎ参拝者は各船に
乗り込み沖ノ島を周遊し、
秘なる景観を拝しながら帰
路についた。

一方、沖ノ島に渡島出来
ない女性子供達は、大島
の沖津宮参拝所の祭典に参
列し、遙か沖ノ島に祈りを
捧げた。

九十七年前の国際情
勢は、欧米諸国がアジア・
アフリカ・南米を植民地と
して取り合うという中で、
欧洲への進出が難しいロシ
アは、シベリアへ進出、極東
まで達し、朝鮮半島進出を
狙っていた。その次は日本
である。当時アジアで唯一
独立し、歐米諸国と渡り合
ていたのは日本ただ一国だ
けであった。その中で開戦
するには相当の勇気と覚悟
があったにちがいない。そ

が、西郷の命運をかけて日
本海々戦が行われたのが五
月二十七日(土)だったのです。
――◇――◇――

明治三十九八年(一九〇五年)当
初、西郷は沖津宮に勤務して
いた神職の日誌は、
次のように記している。

五月二十七日
西風強暴大霧霞
午前七時四十五分に「警
戒を要す」との電報を受け
る。正午頃島の西北より砲声
が聞こえ出す。午後一時頃「我艦隊見え
ざりしや」の電報をうける。
当日は霧霞のため五海里
より先は見えず。

その後、一同波止場で沖
ノ島間より調理された刺
身・鮓魚、その煮汁で食べ
るソーメンに屋台で打ちな
がら出航まで和やかな一
時を過ごした。

大祭前日の二十六日筑前
大島に渡島した太田宮司以
下九人の神職を始め、翌日
は二〇〇人の参拝者を受け
入れた。

正午過ぎ参拝者は各船に
乗り込み沖ノ島を周遊し、
秘なる景観を拝しながら帰
路についた。

一方、沖ノ島に渡島出来
ない女性子供達は、大島
の沖津宮参拝所の祭典に参
列し、遙か沖ノ島に祈りを
捧げた。

九十七年前の国際情
勢は、欧米諸国がアジア・
アフリカ・南米を植民地と
して取り合うという中で、
欧洲への進出が難しいロシ
アは、シベリアへ進出、極東
まで達し、朝鮮半島進出を
狙っていた。その次は日本
である。当時アジアで唯一
独立し、歐米諸国と渡り合
ていたのは日本ただ一国だ
けであった。その中で開戦
するには相当の勇気と覚悟
があったにちがいない。そ

が、西郷の命運をかけて日
本海々戦が行われたのが五
月二十七日(土)だったのです。
――◇――◇――

明治三十九八年(一九〇五年)当
初、西郷は沖津宮に勤務して
いた神職の日誌は、
次のように記している。

五月二十七日
西風強暴大霧霞
午前七時四十五分に「警
戒を要す」との電報を受け
る。正午頃島の西北より砲声
が聞こえ出す。午後一時頃「我艦隊見え
ざりしや」の電報をうける。
当日は霧霞のため五海里
より先は見えず。

正午過ぎ参拝者は各船に
乗り込み沖ノ島を周遊し、
秘なる景観を拝しながら帰
路についた。

一方、沖ノ島に渡島出来
ない女性子供達は、大島
の沖津宮参拝所の祭典に参
列し、遙か沖ノ島に祈りを
捧げた。

九十七年前の国際情
勢は、欧米諸国がアジア・
アフリカ・南米を植民地と
して取り合うという中で、
欧洲への進出が難しいロシ
アは、シベリアへ進出、極東
まで達し、朝鮮半島進出を
狙っていた。その次は日本
である。当時アジアで唯一
独立し、歐米諸国と渡り合
ていたのは日本ただ一国だ
けであった。その中で開戦
するには相当の勇気と覚悟
があったにちがいない。そ

が、西郷の命運をかけて日
本海々戦が行われたのが五
月二十七日(土)だったのです。
――◇――◇――

明治三十九八年(一九〇五年)当
初、西郷は沖津宮に勤務して
いた神職の日誌は、
次のように記している。

五月二十七日
西風強暴大霧霞
午前七時四十五分に「警
戒を要す」との電報を受け
る。正午頃島の西北より砲声
が聞こえ出す。午後一時頃「我艦隊見え
ざりしや」の電報をうける。
当日は霧霞のため五海里
より先は見えず。

正午過ぎ参拝者は各船に
乗り込み沖ノ島を周遊し、
秘なる景観を拝しながら帰
路についた。

一方、沖ノ島に渡島出来
ない女性子供達は、大島
の沖津宮参拝所の祭典に参
列し、遙か沖ノ島に祈りを
捧げた。

九十七年前の国際情
勢は、欧米諸国がアジア・
アフリカ・南米を植民地と
して取り合うという中で、
欧洲への進出が難しいロシ
アは、シベリアへ進出、極東
まで達し、朝鮮半島進出を
狙っていた。その次は日本
である。当時アジアで唯一
独立し、歐米諸国と渡り合
ていたのは日本ただ一国だ
けであった。その中で開戦
するには相当の勇気と覚悟
があったにちがいない。そ

が、西郷の命運をかけて日
本海々戦が行われたのが五
月二十七日(土)だったのです。
――◇――◇――

明治三十九八年(一九〇五年)当
初、西郷は沖津宮に勤務して
いた神職の日誌は、
次のように記している。

五月二十七日
西風強暴大霧霞
午前七時四十五分に「警
戒を要す」との電報を受け
る。正午頃島の西北より砲声
が聞こえ出す。午後一時頃「我艦隊見え
ざりしや」の電報をうける。
当日は霧霞のため五海里
より先は見えず。

正午過ぎ参拝者は各船に
乗り込み沖ノ島を周遊し、
秘なる景観を拝しながら帰
路についた。

一方、沖ノ島に渡島出来
ない女性子供達は、大島
の沖津宮参拝所の祭典に参
列し、遙か沖ノ島に祈りを
捧げた。

九十七年前の国際情
勢は、欧米諸国がアジア・
アフリカ・南米を植民地と
して取り合うという中で、
欧洲への進出が難しいロシ
アは、シベリアへ進出、極東
まで達し、朝鮮半島進出を
狙っていた。その次は日本
である。当時アジアで唯一
独立し、歐米諸国と渡り合
ていたのは日本ただ一国だ
けであった。その中で開戦
するには相当の勇気と覚悟
があったにちがいない。そ

が、西郷の命運をかけて日
本海々戦が行われたのが五
月二十七日(土)だったのです。
――◇――◇――

明治三十九八年(一九〇五年)当
初、西郷は沖津宮に勤務して
いた神職の日誌は、
次のように記している。

五月二十七日
西風強暴大霧霞
午前七時四十五分に「警
戒を要す」との電報を受け
る。正午頃島の西北より砲声
が聞こえ出す。午後一時頃「我艦隊見え
ざりしや」の電報をうける。
当日は霧霞のため五海里
より先は見えず。

余滴

正午過ぎ参拝者は各船に
乗り込み沖ノ島を周遊し、
秘なる景観を拝しながら帰
路についた。

一方、沖ノ島に渡島出来
ない女性子供達は、大島
の沖津宮参拝所の祭典に参
列し、遙か沖ノ島に祈りを
捧げた。

九十七年前の国際情
勢は、欧米諸国がアジア・
アフリカ・南米を植民地と
して取り合うという中で、
欧洲への進出が難しいロシ
アは、シベリアへ進出、極東
まで達し、朝鮮半島進出を
狙っていた。その次は日本
である。当時アジアで唯一
独立し、歐米諸国と渡り合
ていたのは日本ただ一国だ
けであった。その中で開戦
するには相当の勇気と覚悟
があったにちがいない。そ

が、西郷の命運をかけて日
本海々戦が行われたのが五
月二十七日(土)だったのです。
――◇――◇――

明治三十九八年(一九〇五年)当
初、西郷は沖津宮に勤務して
いた神職の日誌は、
次のように記している。

五月二十七日
西風強暴大霧霞
午前七時四十五分に「警
戒を要す」との電報を受け
る。正午頃島の西北より砲声
が聞こえ出す。午後一時頃「我艦隊見え
ざりしや」の電報をうける。
当日は霧霞のため五海里
より先は見えず。

正午過ぎ参拝者は各船に
乗り込み沖ノ島を周遊し、
秘なる景観を拝しながら帰
路についた。

一方、沖ノ島に渡島出来
ない女性子供達は、大島
の沖津宮参拝所の祭典に参
列し、遙か沖ノ島に祈りを
捧げた。

九十七年前の国際情
勢は、欧米諸国がアジア・
アフリカ・南米を植民地と
して取り合うという中で、
欧洲への進出が難しいロシ
アは、シベリアへ進出、極東
まで達し、朝鮮半島進出を
狙っていた。その次は日本
である。当時アジアで唯一
独立し、歐米諸国と渡り合
ていたのは日本ただ一国だ
けであった。その中で開戦
するには相当の勇気と覚悟
があったにちがいない。そ

が、西郷の命運をかけて日
本海々戦が行われたのが五
月二十七日(土)だったのです。
――◇――◇――

明治三十九八年(一九〇五年)当
初、西郷は沖津宮に勤務して
いた神職の日誌は、
次のように記している。

五月二十七日
西風強暴大霧霞
午前七時四十五分に「警
戒を要す」との電報を受け
る。正午頃島の西北より砲声
が聞こえ出す。午後一時頃「我艦隊見え
ざりしや」の電報をうける。
当日は霧霞のため五海里
より先は見えず。

正午過ぎ参拝者は各船に
乗り込み沖ノ島を周遊し、
秘なる景観を拝しながら帰
路についた。

一方、沖ノ島に渡島出来
ない女性子供達は、大島
の沖津宮参拝所の祭典に参
列し、遙か沖ノ島に祈りを
捧げた。

九十七年前の国際情
勢は、欧米諸国がアジア・
アフリカ・南米を植民地と
して取り合うという中で、
欧洲への進出が難しいロシ
アは、シベリアへ進出、極東
まで達し、朝鮮半島進出を
狙っていた。その次は日本
である。当時アジアで唯一
独立し、歐米諸国と渡り合
ていたのは日本ただ一国だ
けであった。その中で開戦
するには相当の勇気と覚悟
があったにちがいない。そ

が、西郷の命運をかけて日
本海々戦が行われたのが五
月二十七日(土)だったのです。
――◇――◇――

明治三十九八年(一九〇五年)当
初、西郷は沖津宮に勤務して
いた神職の日誌は、
次のように記している。

五月二十七日
西風強暴大霧霞
午前七時四十五分に「警
戒を要す」との電報を受け
る。正午頃島の西北より砲声
が聞こえ出す。午後一時頃「我艦隊見え
ざりしや」の電報をうける。
当日は霧霞のため五海里
より先は見えず。

余滴

夏季特別祈願祭

お知らせ

宗像大社社務所
各位

平成十四年六月吉日

宗像大社社務所
各位

平成十四年六月吉日

正午過ぎ参拝者は各船に
乗り込み沖ノ島を周遊し、
秘なる景観を拝しながら帰
路についた。

一方、沖ノ島に渡島出来
ない女性子供達は、大島
の沖津宮参拝所の祭典に参
列し、遙か沖ノ島に祈りを
捧げた。

九十七年前の国際情
勢は、欧米諸国がアジア・
アフリカ・南米を植民地と
して取り合うという中で、
欧洲への進出が難しいロシ
アは、シベリアへ進出、極東
まで達し、朝鮮半島進出を
狙っていた。その次は日本
である。当時アジアで唯一
独立し、歐米諸国と渡り合
ていたのは日本ただ一国だ
けであった。その中で開戦
するには相当の勇気と覚悟
があったにちがいない。そ

が、西郷の命運をかけて日
本海々戦が行われたのが五
月二十七日(土)だったのです。
――◇――◇――

明治三十九八年(一九〇五年)当
初、西郷は沖津宮に勤務して
いた神職の日誌は、
次のように記している。

五月二十七日
西風晴
朝鮮松島附近に於いて、
彼我大激戦中の事、十時
頃の電報に敵は少なくとも
四隻は撃沈せられると。

正午過ぎ参拝者は各船に
乗り込み沖ノ島を周遊し、
秘なる景観を拝しながら帰
路についた。

一方、沖ノ島に渡島出来
ない女性子供達は、大島
の沖津宮参拝所の祭典に参
列し、遙か沖ノ島に祈りを
捧げた。

九十七年前の国際情
勢は、欧米諸国がアジア・
アフリカ・南米を植民地と
して取り合うという中で、
欧洲への進出が難しいロシ
アは、シベリアへ進出、極東
まで達し、朝鮮半島進出を
狙っていた。その次は日本
である。当時アジアで唯一
独立し、歐米諸国と渡り合
ていたのは日本ただ一国だ
けであった。その中で開戦
するには相当の勇気と覚悟
があったにちがいない。そ

が、西郷の命運をかけて日
本海々戦が行われたのが五
月二十七日(土)だったのです。
――◇――◇――

明治三十九八年(一九〇五年)当
初、西郷は沖津宮に勤務して
いた神職の日誌は、
次のように記している。

五月二十七日
西風晴
朝鮮松島附近に於いて、
彼我大激戦中の事、十時
頃の電報に敵は少なくとも
四隻は撃沈せられると。

余滴

一、期間 七月一日～九月一日
金・土・日曜・祝日・お盆の夜

一、時間 午後十時まで

一、初穂料・交通安全
一台 普通 五、〇〇〇円

一、件 諸祈願
一件 五、〇〇〇円

一、件 お問い合わせ先
宗像大社社務所

電話 ○九四〇一六一三一三一五
FAX ○九四〇一六一三一三一五

M・A

第六十四期出光店主室教育

宗像大社研修記

人が入り、研修生の時は鋭い質問に答えた。



夏越祭・大祓神事御案内

大社の神宝⑤ こんどうせいしんよう 金銅製心葉形杏葉

杏葉(ぎょうよう)は馬の頭・胸・腰の部分を飾り立てるもので、下方から足元へなびいている。脚は鳥身の中央下に伸びており、彫刻のものがある。杏葉の名称は、形が馬の頭に似ていることに由来すると言われ、その起源は西方にあるとさる。

杏あるいは銀杏に似ている。杏葉は個々に違つておらず、彫刻のものがあつたり、目を隈取したりと色々な表現がある。五枚のうち三枚は鳥身が右向きに一枚左向きになつていて、鳥人像については、鳥人像についても稀であるが、朝鮮句麗(こうり)の古墳の壁画等に数例見られる。

これは当社では、尾は後方へ、一尾は

西から東へ、二尾は

北から南へ、三尾は

東から西へ、四尾は

南から北へ、五尾は

東から西へ、六尾は

北から南へ、七尾は

東から西へ、八尾は

北から南へ、九尾は

東から西へ、十尾は

北から南へ、十一尾は

東から西へ、十二尾は

北から南へ、十三尾は

東から西へ、十四尾は

北から南へ、十五尾は

東から西へ、十六尾は

北から南へ、十七尾は

東から西へ、十八尾は

北から南へ、十九尾は

東から西へ、二十尾は

北から南へ、二十一尾は

東から西へ、二十二尾は

北から南へ、二十三尾は

東から西へ、二十四尾は

北から南へ、二十五尾は

東から西へ、二十六尾は

北から南へ、二十七尾は

東から西へ、二十八尾は

北から南へ、二十九尾は

東から西へ、三十尾は

北から南へ、三十一尾は

東から西へ、三十二尾は

北から南へ、三十三尾は

東から西へ、三十四尾は

北から南へ、三十五尾は

東から西へ、三十六尾は

北から南へ、三十七尾は

東から西へ、三十八尾は

北から南へ、三十九尾は

東から西へ、四十尾は

北から南へ、四十一尾は

東から西へ、四十二尾は

北から南へ、四十三尾は

東から西へ、四十四尾は

北から南へ、四十五尾は

東から西へ、四十六尾は

北から南へ、四十七尾は

東から西へ、四十八尾は

北から南へ、四十九尾は

東から西へ、五十尾は

北から南へ、五十一尾は

東から西へ、五十二尾は

北から南へ、五十三尾は

東から西へ、五十四尾は

北から南へ、五十五尾は

東から西へ、五十六尾は

北から南へ、五十七尾は

東から西へ、五十八尾は

北から南へ、五十九尾は

東から西へ、六十尾は

北から南へ、六十一尾は

東から西へ、六十二尾は

北から南へ、六十三尾は

東から西へ、六十四尾は

北から南へ、六十五尾は

東から西へ、六十六尾は

北から南へ、六十七尾は

東から西へ、六十八尾は

北から南へ、六十九尾は

東から西へ、七十尾は

北から南へ、七十一尾は

東から西へ、七十二尾は

北から南へ、七十三尾は

東から西へ、七十四尾は

北から南へ、七十五尾は

東から西へ、七十六尾は

北から南へ、七十七尾は

東から西へ、七十八尾は

北から南へ、七十九尾は

東から西へ、八十尾は

北から南へ、八十一尾は

東から西へ、八十二尾は

北から南へ、八十三尾は

東から西へ、八十四尾は

北から南へ、八十五尾は

東から西へ、八十六尾は

北から南へ、八十七尾は

東から西へ、八十八尾は

北から南へ、八十九尾は

東から西へ、九十尾は

北から南へ、九十一尾は

東から西へ、九十二尾は

北から南へ、九十三尾は

東から西へ、九十四尾は

北から南へ、九十五尾は

東から西へ、九十六尾は

北から南へ、九十七尾は

東から西へ、九十八尾は

北から南へ、九十九尾は

東から西へ、一百尾は

北から南へ、一百一尾は

東から西へ、一百二尾は

北から南へ、一百三尾は

東から西へ、一百四尾は

北から南へ、一百五尾は

東から西へ、一百六尾は

北から南へ、一百七尾は

東から西へ、一百八尾は

北から南へ、一百九尾は

東から西へ、一百十尾は

北から南へ、一百十一尾は

東から西へ、一百十二尾は

北から南へ、一百十三尾は

東から西へ、一百十四尾は

北から南へ、一百十五尾は

東から西へ、一百十六尾は

北から南へ、一百十七尾は

東から西へ、一百十八尾は

北から南へ、一百十九尾は

東から西へ、一百二十尾は

北から南へ、一百二十一尾は

東から西へ、一百二十二尾は

北から南へ、一百二十三尾は

東から西へ、一百二十四尾は

北から南へ、一百二十五尾は

東から西へ、一百二十六尾は

北から南へ、一百二十七尾は

東から西へ、一百二十八尾は

北から南へ、一百二十九尾は

東から西へ、一百三十尾は

北から南へ、一百三十一尾は

東から西へ、一百三十二尾は

北から南へ、一百三十三尾は

東から西へ、一百三十四尾は

北から南へ、一百三十五尾は

東から西へ、一百三十六尾は

北から南へ、一百三十七尾は

東から西へ、一百三十八尾は

北から南へ、一百三十九尾は

東から西へ、一百四十尾は

北から南へ、一百四十一尾は

東から西へ、一百四十二尾は

北から南へ、一百四十三尾は

東から西へ、一百四十四尾は

北から南へ、一百四十五尾は

東から西へ、一百四十六尾は

北から南へ、一百四十七尾は

東から西へ、一百四十八尾は

北から南へ、一百四十九尾は

東から西へ、一百五十尾は

北から南へ、一百五十一尾は

東から西へ、一百五十二尾は

北から南へ、一百五十三尾は

東から西へ、一百五十四尾は

北から南へ、一百五十五尾は

東から西へ、一百五十六尾は

北から南へ、一百五十七尾は

東から西へ、一百五十八尾は

北から南へ、一百五十九尾は

東から西へ、一百六十尾は

北から南へ、一百六十一尾は

東から西へ、一百六十二尾は

北から南へ、一百六十三尾は

東から西へ、一百六十四尾は

北から南へ、一百六十五尾は

東から西へ、一百六十六尾は

北から南へ、一百六十七尾は

東から西へ、一百六十八尾は

北から南へ、一百六十九尾は

東から西へ、一百七十尾は

北から南へ、一百七十一尾は

東から西へ、一百七十二尾は

北から南へ、一百七十三尾は

東から西へ、一百七十四尾は

北から南へ、一百七十五尾は

東から西へ、一百七十六尾は

北から南へ、一百七十七尾は

東から西へ、一百七十八尾は

北から南へ、一百七十九尾は

東から西へ、一百八十尾は

北から南へ、一百八十一尾は

東から西へ、一百八十二尾は

北から南へ、一百八十三尾は

東から西へ、一百八十四尾は

北から南へ、一百八十五尾は

東から西へ、一百八十六尾は

北から南へ、一百八十七尾は

東から西へ、一百八十八尾は

北から南へ、一百八十九尾は

東から西へ、一百九十尾は

北から南へ、一百九十一尾は

東から西へ、一百九十二尾は

北から南へ、一百九十三尾は

東から西へ、一百九十四尾は

北から南へ、一百九十五尾は

東から西へ、一百九十六尾は

北から南へ、一百九十七尾は

東から西へ、一百九十八尾は

北から南へ、一百九十九尾は

東から西へ、一百二十尾は

北から南へ、一百二十一尾は

東から西へ、一百二十二尾は

北から南へ、一百二十三尾は

東から西へ、一百二十四尾は

北から南へ、一百二十五尾は

東から西へ、一百二十六尾は

北から南へ、一百二十七尾は

東から西へ、一百二十八尾は

北から南へ、一百二十九尾は

東から西へ、一百三十尾は

北から南へ、一百三十一尾は

東から西へ、一百三十二尾は

北から南へ、一百三十三尾は

東から西へ、一百三十四尾は

北から南へ、一百三十五尾は

東から西へ、一百三十六尾は

北から南へ、一百三十七尾は

東から西へ、一百三十八尾は

北から南へ、一百三十九尾は

東から西へ、一百四十尾は

北から南へ、一百四十一尾は

東から西へ、一百四十二尾は

北から南へ、一百四十三尾は

東から西へ、一百四十四尾は

北から南へ、一百四十五尾は

東から西へ、一百四十六尾は

北から南へ、一百四十七尾は

東から西へ、一百四十八尾は

北から南へ、一百四十九尾は

東から西へ、一百五十尾は

北から南へ、一百五十一尾は</

